

## 誰もがふらっと参加できる居場所としての、教育・福祉農園型農業公園での取り組み — 区立次大夫堀公園内里山農園を事例として —

一般財団法人世田谷トラストまちづくり トラストみどり課

菊地 直人、角屋 ゆず

(公園・緑地 居場所 農福連携)

### 1. はじめに

世田谷トラストまちづくりでは、区立次大夫堀公園内里山農園という約500㎡ほどの小さな畑の管理・運営を行っている。人にも生きものにも優しい農園をコンセプトに、地域の方々と月に一度、畑の耕作や堆肥づくりなどの活動プログラムを実施している。ここは区立農業公園であり、その中でも「教育・福祉農園」として位置づけられ、子どもの食育や環境教育、障がいのある方もそうでない方も、誰もが一緒に楽しみ活動できる農園を目指している。社会福祉協議会からは、ぷらっとホーム世田谷の利用者などに活動参加の周知をするなどの協力をいただいている。



「農福連携」では、担い手不足や高齢化が進む農業分野と就労の場を求める福祉分野が連携して問題を解決することが一般的だが、里山農園では居場所としての機能を重視した財団独自の「農福連携」を進めている。ふらっと参加してもそれぞれが思い思いに過ごせ、外出するきっかけづくりや何気ないコミュニケーションの機会となっている。本学会では、里山農園の取り組みをケースにした、農業公園がもたらす福祉的価値や方向性などについて取り上げる。

### 2. 実践内容

里山農園は、農業指導アドバイザーの協力のもと、農薬や化学肥料を使わないことや、入口フェンスの近くに花苗を植栽するなど、生物多様性豊かな環境を目指して管理している。定例活動は全員で農園を一周し観察することからはじまる。生きものたちとの出会いや植物の生育に目を向けている。農作業だけではなく、自然や生きものの存在をより身近に感じることができる。一回の活動に大体20名くらいが参加するが、その参加形態も多様で、小さいお子さんと散歩がてら様子だけ見に来る人、後半から参加し、少しだけ作業する人、定例活動以外に一人で来て雑草を抜くなど自主活動をする人など、それぞれが思い思いに過ごしている。



### 3. 考察と今後の課題

教育・福祉農園型農業公園での取り組みについて里山農園を事例として取り上げたが、その福祉的価値について以下の三つの視点から考察する。

